六月十三日

全線激闘を續く

第二十四師團は歩兵第三十二聯隊正面を緊縮強化する目的を以て第二線に控置せし歩兵第二十二聯隊主力を最左翼眞榮里正面に推進すると共に最右翼八重瀬岳方面よりする側背の脅威を除去する目的を以て捜索第二十四聯隊主力をして該方面に攻撃を取らしむ混成旅團は八重瀬岳方面の左地區隊との連絡を回復し得ざるのみならず今や其の中央及右翼の保持に忙殺され左翼を救ふの餘力なし旅團長は軍企圖に基き新に增加せられたる獨立歩兵第十五大隊を八重瀬岳に又獨立歩兵第十三大隊も最右翼に夫々前進せしめ兩翼の崩壞を阻止する如く處置せり

軍砲兵隊は各種砲約二十門を有するも彈藥殆盡き加ふるに部隊の素質極度に低下し且上下左右觀砲間の通信連絡其の機能を失ひ歩砲の協同機を失ること多く其の實力首里戰線當時とは比すべくもなし

軍は今や殆無裝備となれる全軍將兵が徒手空拳敵の艦砲爆擊迫擊砲、機銃等の集中する中を切齒扼腕しつゝ敵戰車群に突入日々大量的に自殺しつゝあるを觀て痛憤、勘堪へず大本營方面軍奄美守備隊悉島集團等より兵器彈藥を入手せんと焦慮狂奔せり然れども遠く海洋を隔て孤立無援の重圍下に在りては策の施すべき余地なし僅かに中央部最後の努力に成る望中輸送に依り手榴彈、擲彈筒等を二、三機分受領せるに過ぎず奄美守備隊長の熱烈なる救濟企圖に基く彈藥積載の刳舟五隻は遙か德之島より中城灣外津嘉島沖に無事南航し來れるも遂に軍主力陣地を指呼のうちに眺めつゝ敵掃海艇の襲擊を受け委く海底の藻屑と化し去れり

六月十四日

混成旅團右翼に增加を命ぜられたる獨立歩兵第十三大隊は隊長原大佐の指揮適切にして夜暗嚴烈なる敵の砲擊下疲勞困憊素質劣惡となれる部隊なるに拘らず山城附近より敏速に與座、仲座南側に進出戰闘に參加せり然れども珊瑚岸上據るべき陣地も地物もなく

一日にして其の戰力の大部を喪失せり獨立歩兵第十五大隊は全軍の期待に拘はらず其の進出緩漫（大隊長飯塚少佐は重病にて擔架上より指揮しありしと謂ふ）にして與座岳南方の線を越へて前進する模樣なし第二十四師團長より同大隊の攻擊前進を要求する督促頻りなるも今や八重瀬岳確保の希望は放棄の止むなき狀況なり

第二十四師團主力正面は概ね其の陣地を確保しあり

六月十五日

混成旅團方面に於ては左地區隊に引續き白砲第一聯隊長の擔任する中地區隊の消息も亦不明となれり戰線既に統一なく諸隊は安里仲座附近各據點に據り孤立死鬪しあるものゝ如し

第二十四師團の最右翼與座岳附近を占領しある歩兵第八十九聯隊は八重瀬岳方面より絶へず側背を脅威せられ戰力分散すると共に動搖しありしが遂に地形的に最も堅固と判斷せる與座、八重瀬兩高地中間地區を北方より突破せらるゝに至れり

茲に於て軍は第六十二師團全力を混成旅團正面に投入し東方正面の敵に最後の出血を強要するに決せり

第六十二師團長は軍命令に基き歩兵第六十三旅團長中島中將をして部下旅團と共に混成旅團を併せ指揮し東方正面の戰鬪を擔任せしめ歩兵第六十四旅團を眞榮平東南方地區に推進する如く處置せり師團司令部は依然山城に在り

機密作戰日誌

一、混成旅團正面危急を告ぐるや第六十二師團を同方面第一線兵團たらしめ極力八重瀬岳に連繫する陣地に於て戰鬪せんとする軍の方針に對し第六十二師團は混成旅團潰滅せば軍司令部は摩文仁高地より眞榮平附近第二十四師團司令部に撤退合流し東方正面は與座島岳に連繫する陣地に於て抵抗を繼續し第六十二師團は山城を中心とする現配置を以て戰鬪するを可とするの意見を有し相當强硬に具申するところありしも軍司令官は之を採用せざりき

二、軍は混成旅團が尙善ふじて與座仲座附近を保持し八重瀬岳は奪

東京小津堂

取せられたりと雖も戰勢浮動しあるに乘じ第六十二師團は逐次戰鬪加入の要領に依り極力現陣地帶に於て戰鬪を繼續せんとを希求せるも諸般の情勢は漸次之を不可能ならしむるに至れり

六月十六日

混成旅團正面に於ては其の主力たる右地區隊（獨立混成第十五聯隊）も遂に其の消息を絶つに至り旅團司令部は一〇八高地に於て直接敵戰車群の攻擊を受けつゝあり

第六十二師團主力の東方機動は未熟なる地形に於て暗夜熾烈なる砲擊下遲々として進まず師團の企圖は先ず混成旅團の掩護下に與座岳南方の線に態勢を整へたる後半遭遇戰的攻擊前進し舊陣地帶を奪還し止むを得ざれば現在の態勢の線に於て敵を邀擊せんとするに在り

六月十七日

混成旅團司令部及其の直轄部隊は一〇八高地及與座岳附近を頑守しあり

第六十二師團主力は依然機動中なり

軍司令官は第六十二師團長に對し摩文仁高地に前進を命ぜり

第二十四師團正面に於ては歩兵第八十九聯隊は與座を奪取せられて新垣附近に壓迫せられ更に強大なる敵の爲に歩兵第三十二、第二十二聯隊の中間地區を突破せられ全線方に崩壞狀態となれり

此の日歩兵第二十二聯隊本部は聯隊長以下殆全員七三高地に於て全滅す

六月十八日

第六十二師團の機動概ね完了す

歩兵第六十三旅團摩文仁一〇八高地中間地區に歩兵第六十四旅團は眞榮平東方地區に在り

此の夜混成旅團司令部は摩文仁に後退す

第二十四師團正面に於ては歩兵第八十九聯隊方面逐次崩壞すると共に歩兵第二十二聯隊方面を突破せし敵戰車群は既に師團司令部所在眞榮平西北地區に侵入しつゝあり

斯くて軍は摩文仁を中心とする軍司令部第六十二師團軍砲兵混成旅團司令部を基幹とする集團とし漸次大きく分離隔せんとの態勢となれり此の頃迄に衛生機關を始め有ゆる後方人員委く戰鬪隊に配屬せられ敢鬪中なり

六月十九日

軍司令官は軍の運命愈々盡きたるを知り大本營方面軍及關係各軍に對し訣別の電報を發すると共に隷下指揮下各部隊に對し左記要旨の最後の軍命令を下達せり

「全軍將兵の三ヶ月に亘る勇戰敢鬪に依り遺憾なく軍の任務を遂行し得たるは同屬の至りなり然れども今や刀折れ矢盡き軍の運命旦夕に迫る既に部隊間の通信連絡を杜絶せんとし軍司令官の指揮は至難となれり爾今各部隊は各局地に於ける生存者中の上級者之を指揮し最後迄敢鬪して悠久の大義に生くべし」

此の日軍司令官幕僚全員僅に殘れる饑餓瀕死の若干の酒を以て訣別の宴を張る折りから摩文仁東方約千五百米の稜線上に敵戰車十數輛出現戰車砲彈司令部洞窟附近に集中す

此の夜參謀の大部司令部將兵約二十名大本營連絡或は激擊戰の任務を受けて出撃す

歩兵第八十九聯隊長及工兵第二十四聯隊長新垣に於て戰死との報あり

六月二十日

摩文仁を中心とする周圍千五百米の圏内熾烈なる砲爆撃の間戰車砲、機銃、小銃擊又戰んにして愈々戰鬪は最後的段階となれり

第十方面軍司令官より第三十二軍司令官に對し別紙第一の如き感狀授與の電報あり

六月二十一日

第二十四師團司令部とは徒歩傳令に依り最後の連絡を爲す

摩文仁高地周邊に在る第六十二師團混成旅團軍砲兵隊各司令部との間は依然徒歩連絡を續けたり

各司令部毎に玉碎するに決す

東京小津印

昨二十日敵手に入れる摩文仁部落を司令部衛兵一小隊を以て奪還す此の日陸軍大臣參謀總長より軍司令官宛の訣別電報來る右電報に依り米軍司令官シモンバフイナー將軍十七日眞壁附近に於て戰死せるを知る

六月二十二日

正午頃摩文仁部落の銃聲止む同地守備の衛兵全滅せるものゝ如し時餘にして司令部洞窟垂坑道上山頂衛兵敵に急襲せられて委く殪る敵の爆雷手榴彈洞窟内に落下し參謀長室附近に在りし將兵十數名死傷す漢愉の氣洞窟に溢る

軍砲兵隊司令部は既に昨夜總員斬込せるの報あり

軍司令部は本部司令部生存者を以て八九高地山頂を奪還明二十三日黎明を期し全員摩文仁部落方向に突擊此の間軍司令官參謀長は山頂に於て自決するに決す

司令部將兵は予定の如く十七夜の月未だ上らざるに乘じ海岸に面する坑道口より山頂に向ひ相互に訣別しつゝ斷崖を攀登突擊す

突擊功を奏せず

依つて予定を變更し軍司令官參謀長は月將に南海に沒せんとする頃坑道口外海面に屹立する斷崖上に於て古武士の型のみ自決し終りぬ

時に昭和二十年六月二十三日四時三十分なり

B、國頭支隊の戰鬪（別紙要圖第七參照）

其の一　遊擊戰轉移の狀況

一般の狀況

四月一日嘉手納海岸に上陸する米海兵第三軍團は一部を以て北、中飛行場地區に在りし、特設第一聯隊並に恩納岳を根據とする第四遊擊隊を攻擊すると共に主力を以て陸路名護方面に北上更に之に策應するかの如く其の一部は四月七日名護灣に上陸し四月九日頃には本部半島に在る國頭支隊主力は完全に包圍せらるゝに至れり

第四遊擊隊の狀況

敵の嘉手納海岸に上陸するや直ちに中頭地區に對する遊擊戰を企圖し四月一日夜恩納岳より石川岳に前進す遇々同高地に潰走し來たる特設第一聯隊及海軍部隊と共に（總員約二千）敵の攻擊を受け目的を達せず四月六日恩納岳に後退し之を死守す

第三遊擊隊の狀況

タニヨ岳を根據とし四月七日頃より漸次其の周邊地區に對し遊擊戰

東京小津稿

開始す

國頭支隊主力の狀況

四月九日二〇〇〇頃の第一線は安和伊豆味、乙羽岳の線に進出す

十三日頃より戰烈なる砲爆と相俟ちて敵地上部隊の攻擊本格化し十四日八重岳周邊の支隊主力は完全に包圍せらる敵の攻擊は二七〇高地方面に於て特に猛烈にして先づ該方面より陣地を突破進入せらる

茲に[redacted]於て支隊長は十五日夜現陣地を放棄し伊豆味附近を經てダニヨ岳に轉進し遊擊戰に轉移するに決す支隊主力は十八日頃より遂次ダニヨ岳に到着し二十日頃には約四千の兵力を集結二十三日一應の防禦砲備を完了せり

敵は二十三日ダニヨ岳包圍の態勢を完成二十四日集中砲爆擊を加へつゝ羽根地名護正面より攻擊し來たる此の夜支隊主力は國頭北部地區に分散轉進し二十五日ダニヨ岳は敵の占領するところとなる

伊江島守備隊の狀況

敵は十五日伊江島西海岸に上陸同方面守備を擔任しありし田村大尉の指揮する飛行場設定部隊を壓迫して一擊に島の中部八二高地の線に進出更に十六日伊江島東南岸に上陸城山を主心とする守備隊主力第二歩兵隊第一大隊）の陣地を西方及南方より猛攻を加ふ同守備隊は募兵克く善戰敢鬪せしも十九日夜守備隊長佐藤少佐逆襲の爲城山麓を前進中戰死し部隊の戰力又此の頃迄に概ね盡き二十日伊江島は完全に敵手に入れり

機密戰作日誌

「軍司令部と國頭支隊との通信連絡は四月十五日名護東方地區に轉進し遊擊戰に轉移する」の無電も報告を最后として杜絶し爾後同支隊主力は勿論各遊擊隊伊江島守備隊の狀況は軍司令部には全然不明なり

前述諸狀況は五月上旬第三遊擊隊長の派遣せし連絡者の到著迄に之に端緒を得て軍より派遣せし浦田少尉以下の挺進連絡班に依り逐次判明せり

三、軍は作戰開始前に於ては敵は直ちに伊江島に上陸するや或は本

東京小津機